

<b>Title</b>	ヴィクトリア時代思想セミナー：「ヴィクトリア時代の詩と知識人：「森」とのかかわりにおいて」「J.S.ミルの道徳論とコールリッジ」
<b>Author(s)</b>	斎藤, 薫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 31-31
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3527">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3527</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# ヴィクトリア時代思想セミナー

「ヴィクトリア時代の詩と知識人——「森」とのかかわりにおいて」

「J.S.ミルの道徳論とコールリッジ」

2011年8月7日午後2時から6時、横浜ランドマークタワー内、横浜国大サテライト教室において、ヴィクトリア時代思想セミナーが開催された。同セミナーは横浜国立大学の泉谷周三郎名誉教授を代表（事務局：有江大介教授）に2008年に設立され、今まで相互交流が少なかった人文学、歴史学、社会科学など各分野ごとの研究を総括的に描き出すために、これらの結節点とも言えるJ.S.ミルを軸に研究している。第9回にあたる今回の研究会では、聖学院大学大学院の新井明先生と、横浜国立大学の泉谷周三郎先生による発表があった。

新井先生は「ヴィクトリア時代の詩と知識人——「森」とのかかわりにおいて」と題して講演された。

古来ヨーロッパでは、森は不気味な存在として畏怖されてきた。シーザーの『ガリア戦記』やダンテの『神曲』にも、「黒い森」または「暗い森」に踏み込むことへの不安と恐怖が描かれている。

18世紀になると、技術革新によって森（ドイツトウヒ）は伐採され、切り拓かれる。荒れた森を修復するために、ドイツトウヒの植栽が行われる。グリム兄弟とペロウが書いた『赤頭巾』では、少女は（森の化身である）狼に食われても死なない。ターナーやコロウの描く絵には人間は登場せず、自然が前面に出ている。もはや森（自然）は敵ではなく、人間の味方になっている。

そして19世紀、森は人間にとって親愛なる存在となった。ホーソンの『緋文字』では、森である狼の方からパールに近づいていく。人間はどう生きるべきなのか森（自然）に学ぶ、つまり「師」としての森が描かれる。

質疑応答では、今まで聞いたことがない、新鮮だったなど、参加者から驚きの感想がのべられた。

泉谷先生は、「J.S.ミルの道徳論とコールリッジ」と題して講演された。

3月11日の震災、津波、原発事故を経験した今、

「個人的な幸福のみを追求する事はできない。それぞれの個人と他の生物がおかれている環境全体の保存を維持しながら、個人のよりよい生き方を考慮することが要請される」というスタンスの元に、G.E.ムア、C.テイラー、ワーズワスの著作を中心に、ミルの功利主義論の意義と問題点を提示された。

ムアは「善は単純概念であって定義できないが、善いものは、善い性質や快楽や欲求を含む複合体であって定義できる」という。テイラーは「近代的アイデンティティ」という言葉で、人間という主体、自我、人格についての近代的理解の総体を意味しているとし、近代における文化的・社会的な大転換をどう理解するのかという問題に取り組んでいる。ワーズワスが『序曲』の中であらわした自叙伝詩は真理の直感的表明に満ち、人間精神の内奥に深く浸透し、彼のきわめて特異な心理的洞察の根源を示していると述べた。コールリッジについては、「心で求める救いを、頭が拒否する分裂状態の中で生き、『老水夫の歌』、『失意のオード』を、さまよえるユダヤ人の枠組みで書き上げた、としている。これらについては、それぞれ研究者たちの論文や著作から紹介された。

講演後の質疑応答も、活発で、有意義なものであった。

（文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程）

（2011年8月7日、横浜国立大学サテライト教室）